

<p>平成28年 11月30日</p>	<h1>病虫害発生予報</h1> <h2>12月号</h2>	<p>茨城県病虫害防除所 茨城県植物防疫協会</p>
-------------------------	--------------------------------	--------------------------------

今年の防除作業を振り返り、次作に向けて日誌を準備する等、
よりよい防除へつなげましょう！

＜ 目 次 ＞

<p>I. 今月の予報</p> <p>【注意すべき病虫害】</p> <p>イチゴ：うどんこ病，ハダニ類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1</p> <p>【その他の病虫害】</p> <p>促成ピーマン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2</p> <p>【防除所レポート】</p> <p>平成28年産大豆子実に発生した主要な病虫害について・・・・・・・・ 3</p> <p>II. 今月の気象予報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4</p>	
<p>最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。</p>	
<p style="text-align: center;">詳しくは、病虫害防除所へお問い合わせ下さい。 茨城県病虫害防除所 Tel :029-227-2445 予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。 ホームページアドレス http://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/</p>	

I. 今月の予報
【注意すべき病害虫】

イチゴ

1. うどんこ病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 11月下旬現在、発病葉率(本年値 2.9%, 平年値 3.5%)は平年並で、発生地点率(本年値 67%, 平年値 38%)は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が多くなると防除が困難になるため、初期防除を徹底する。
② 罹病部はできるだけ取り除き、ハウス外に持ち出して適切に処分する。
③ 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、FRAC コードもしくは系統の異なる薬剤を用いてローテーション散布する。
④ 発病の予防には、硫黄のくん煙処理が省力的で有効である。
⑤ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。
⑥ 薬剤によっては、果実に汚れが付くものもあるので、十分注意する。

2. ハダニ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並	県下全域

[予報の根拠]

- ① 11月下旬現在、寄生葉率(本年値 2.6%, 過去8年平均値 9.0%)は平年よりやや低く、発生地点率(本年値 44%, 過去8年平均値 55%)は平年並である。
② 11月下旬現在、被害葉率(本年値 5.0%, 平年値 8.9%)は平年並で、発生地点率(本年値 78%, 平年値 49%)は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① ハダニ類は増殖が速いので、発生の少ないうちに防除を徹底する。
② 薬剤は、薬液が葉裏や葉柄にもよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。また、気門封鎖剤以外については、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードもしくは系統の異なる薬剤を用いてローテーション散布する。なお、薬剤散布は、古い下葉を除去してから行うと効果的である。
③ ミヤコカブリダニやチリカブリダニなどの天敵を使用する場合は、薬剤防除により生息密度を下げってから放飼する。
④ ミツバチや天敵を使用する場合は、薬剤の影響日数等に十分注意する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
促成ピーマン	うどんこ病	発生量：やや少ない	11月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。
	アザミウマ類	発生量：平年並	11月下旬現在，平年並の発生である。ただし，発生の多い圃場もあるので注意する。

平成 28 年産大豆子実に発生した主要な病害虫について

平成 28 年産大豆子実における主要病害虫の発生状況と防除対策をまとめました。次作に向けた対策の参考にしてください。

〔発生状況〕

病害では、紫斑病およびべと病の被害粒率が平年より高く、広範囲で発生がみられました（表）。また、虫害では、吸実性カメムシ類の被害粒率は平年並でした（表）。本年は、開花期以降にあたる 8 月中旬～9 月中旬の降水量が平年より多く、病害による被害粒の発生を助長する条件が続いたと考えられます。多発した圃場では、次作に向けて、下記の防除対策を講じてください。

表 平成 28 年産大豆子実における主要病害虫の発生状況

病害虫	被害粒率 (%)			発生地点率 (%)		
	本年	平年 ¹⁾	順位 ²⁾	本年	平年	順位
紫斑病	1.4	0.6	2	85	39	1
べと病	4.0	1.1	1	85	47	2
吸実性カメムシ類	2.9	2.7	6	85	87	6

1) 平年：平成 18～27 年の平均値

2) 順位：本年を含む過去 11 年間における本年値の順位

〔調査圃場〕 県内 13 地点の大豆圃場（タチナガハ 8 圃場、納豆小粒 4 圃場、里のほほえみ 1 圃場）

〔調査方法〕 10 株（/圃場）の上位 20 莢程度（合計 200 莢程度）を採取し、子実の被害を目視で調査した。

〔採取時期〕 平成 28 年 10 月第 4、5 半月

〔防除対策〕

＜紫斑病＞

- ① 種子や被害茎葉は翌年の第一次伝染源となるので、収穫後の被害残渣は適切に処分する。
- ② 連作を避ける。
- ③ 防除適期は開花期の 20 日後頃である。開花期から成熟期までに連続した降雨がある場合は、開花 30 日後に追加防除を行う。
- ④ 県内では、チオファネートメチル剤に対する耐性菌が出現しているため、それ以外の薬剤を使用し、2 回目の防除を行う際は、薬剤耐性菌の出現を防ぐため、1 回目に使用した薬剤とは FRAC コードもしくは系統の異なる薬剤を散布する。
- ⑤ 収穫が遅れると発生が多くなるので注意する。

＜べと病＞

- ① 種子や被害茎葉は翌年の第一次伝染源となるので、収穫後の被害残渣は適切に処分する。
- ② 連作を避ける。
- ③ 密植を避け、風通しを良くする。
- ④ 発病初期からの薬剤防除を徹底する。なお、納豆小粒は、タチナガハに比べ発生が多い傾向にある。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 11月26日から12月25日)

気象庁 (11月24日 発表)

<向こう1か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	30	30	40
	降水量	関東甲信全域	20	40	40
	日照時間	関東甲信全域	40	30	30

[概要]

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<1週目の予報> 11月26日(土曜日)から12月2日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または低い確率ともに40%

<2週目の予報> 12月3日(土曜日)から12月9日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

<3週目から4週目の予報> 12月10日(土曜日)から12月23日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、異なる作用機構分類* (FRACコード, IRACコード)の薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(平成28年4月28日発表)の防除所レポートを参照してください。